

教育計画とその実践上の問題点



及川ふみ

幼児の教育計画とその実践上の問題点ということについては、前任お茶の水女子大学付属幼稚園長在任中からの研究課題として考えていた宿題であった。たまたま三十四年四月から、東横学園二子幼稚園長として、日常当園の幼児たちの状態を観察し、且つ指導するにあたって、その必要性を痛感するとともに、実際にあたっての種々の問題に遭遇し、またその材料となるものも多くあるので、この課題をとりあげてきさやかな研究とした。

最初に幼児の教育計画をたてるにあたって重要な二つの基盤があることはいうまでもない。

その一つは一般的な条件で、教育計画は、子どもの成長発達に適応したものであるということと、同時にその発達を助けるものであるということはおろかすことはできない要点で

ある。文部省から出されている幼稚園教育要領をはじめ、諸所で作成されている保育カリキュラムの類は多くはこの一般的なものに近いものであるといえよう。

その二つは、各地域、各園での、その特殊な条件を大きく加味したものであるということである。

この二つの条件をじゅうぶんにかみ合わせて、各園でその幼稚園に最もふさわしい教育計画が案出されるのであろう。

このように、教育計画が理論的基盤の上に、さらに実情に則したものを入念に立案用意されたとしても、その実践にあたっては種々な問題にぶつかって、計画の変更をよぎなくされることが多いものである。

この計画予定の変更は、勿論幼児のためにより指導を遂行するという重要な条件のもとになされるのであって、このた

めにむしろ実情に沿うという点から日常幼児の指導にあたってしばしばあることである。形式にのみとらわれないで、幼児のためによるこぼしい結果が得られるということである。

さてこの計画実践上の問題となる種々の点を考えてみると、一、幼児の状態つまり幼児自身の心身の発達状態およびその個人差、二、幼稚園の施設設備などの物的な環境、三、幼児を直接指導する教師の定員数、その質、知識技能およびその保育技術や、その経験、などがあげられる。

ここで特に問題点としてとりあげてみるものは、前記のうち、幼児の状態で、これをはじめに取りあつかってみることにした。それは実際的に教師自ら身近かに処理できる問題でもあるためであったからでもある。

年度の初めにあたっては一応年間の教育課程の細案を企画した。勿論、年月週と詳細にわたってあったがその内、第一期の四月より七月までの指導目標を

一、幼稚園の生活を楽しむ、つまり幼稚園生活に対しての安定感をもつこと。二、基本的習慣の自立。三、友だちと仲よく遊ぶ。四、経験内容についての興味。

以上の四つの指導目標を大きくとらえて、かりに経験内容の進展にその計画の変移はやむを得ないということで、全園で教育方針を定めることにした。

この指導の目標の達成のために、先ず入園後間もなく、幼児の保護者に対して、当園の第一期の教育の目標の説明と、その理解と協力をもとめた。

六月下旬にいたって、幼児の幼稚園生活にも一応なじんできたことでもあり、また保護者の方でも入園後の我が子の集団生活に入っている状態についての観察もできた頃とも考えられたので、次のようなアンケートを出してみた。

1 この頃お家でどんなことをして誰と遊んでいますか。
2 幼稚園へよろこんでいきますか。どんな点をよろこびますか。
3 幼稚園でいやなことはどんなことですか。

4 幼稚園から帰ったあと疲れた様子がみえますか。
5 幼稚園へ通うようになってから、しつけの面で、よくできるようになったことがありますか(例えば、お早うございますお休みなさい 行ってまいります いただきます ごちそうさま)など。
6 幼稚園に通うようになってから、お家でも歌をうたったり、絵をかいたり、紙やその他のもので何かつくったりして遊びますか。
7 お父さんは子どもが幼稚園に行くようになったことを喜んでおられますか。
8 お母さんは子どもが幼稚園に行くようになって生活が変わりましたか。
9 幼稚園に対して、何か希望される点はどんなことでしょうか。

以上で、当園の指導目標のねらいについて、幼児の状態の変化を把握しなかった。これによって今後の指導の手がかりを得ようとしたのであった。

その結果の集計の大略は次のようにあらわれた。

幼稚園生活の安定感については、ほとんどの幼児が、幼稚園生活を楽しんでいる様子がみえる。四才児のうち、時々いやがることがある、出がけにちよっといやがる、進んではいけない、などのやや不安定のものが七四名中に三名あった。

生活習慣について、全体的にいつて、よくなった、あいさつができるようになった、手洗いなどよくできるようになった、など全体の三分の二位あり、不じゅうぶんな状態ながら幼稚園の期待する方向にのっている様子が見える。

疲労の点について、疲れた様子がない、がほとんどで、二、三人 時々疲れる というのがあった。

経験内容の興味の内容について、絵をかく、歌をうたう、何かつくって遊んでいる、などが大多数のようであった。

この各家庭よりの答の結果をまとめると同時に、一方幼稚園として教師の立場からも反省してみた。

一、親や教師からはなれなかった幼児がいく名あったか。

また、はなれなかった状態や、その時期や、期間、その原因となるものなどについて。

一、基本的習慣の自立について

特に当園の幼児に重点的に考えたいもの

遊びについて、教師にたよらないで遊べるようになっていくかどうか。

保健の上からみて、身辺の清潔が保たれているかどうか、いつも鼻汁を出しているものがないか、手洗いがよく実践されているかどうか。

排便の状態 できるだけ規則的に可能であるかどうか。

お弁当のたべ方について 食事の仕方や、その後始末ならびに、食後の遊びについて。

一、集団生活について

幼稚園のきまりや、友だちとの関係において。

共同でつかう運動具や、おもちゃの使い方。

スクールバスについて。

友だちと一しょという点について。

一、経験内容についての興味と、ならびにその把握の状態

教師のはなしや、ラジオ・テレビ などの視聴の状態 特

に集団の一員として、よくできないもの。

リズム遊びや、絵画製作についての態度その他。

以上教師が、幼稚園の立場から反省してみたいくつかを挙げてきたが、これらは、相当に問題として研究工夫しなければ

ばならないものである。勿論、多くの幼児のなかには、以上の種々の点で満足するのに近いものもあることはいうまでもないのではあるが、またいずれの点にも、問題になる幼児のあることも事実である。

この点に多くの問題があるのであって、それは、特に選ばれた特殊の幼児の集団でない、普通一般の幼稚園としては当然のことであろう。いいかえれば、幼児の状態が幅広い範囲であるということ、各幼児の個人差が著しいということでもある。内容的に、知能の上でも、生活態度の上でもすべてこの点に大きくあらわれているのである。

このような幼稚園では、教師の努力がいちばん要望されるわけである。

幼児の幼稚園生活の安定感や、生活態度即ち基本的習慣の自立、友だちと仲よく遊ぶ、などの指導目標は、いずれも幼児の遊びの中に、経験内容と直接密接にむすびついて指導されていくべきものであるが、これらの問題を多くはらむ一般の幼稚園では、経験内容の進展は第二次的に考えられなくてはならないと思われる。結論的というならば、経験内容や心の教育計画はここで大いにくいちがってもやむを得ないことであろうと思われる。

ここで再び当園の実際問題として、第二期保育期に入っ

は、一応その指導目標に 友だちと一しょ という点を特にとりあげた。グループ遊び をするということに重点をおいた。

まだまだ教師を独占しようとするもの、教師に大きく依存するものが多い状態であるから、この目標を必要としたものである。

この時期にあたっては、保護者の一斉参観を実施して、その観察の目標を友だちと一しょという点に特にしぼっておい

た。友だちに迷惑をかけるもの、経験内容に興味のもないものなど多く出て、教師や保護者の指導の上に参考にする点が多かった。その原因の一つには、幼児たちが、お母さんに見られるということに特に意識して、あるものは、はしゃいでみたり、あるものは、いやにはずかしがったり などして、幼児の心境がまだまだ不安定の状態におかれていることがよく理解されたのである。しかしさまざまな方法によって、次第に友だちと一しょという目標にむかって今後とも研究努力をつづけていきたいものである。

以上は新しく二子幼稚園の指導の実際についてこの二期にわたってのささやかな仕事であった。